

国立大学法人お茶の水女子大学長の業績評価

平成 30 年 9 月 7 日
国立大学法人お茶の水女子大学
学 長 選 考 会 議

国立大学法人お茶の水女子大学長の業績評価

国立大学法人お茶の水女子大学 学長選考会議

国立大学法人お茶の水女子大学学長選考会議では、国立大学法人お茶の水女子大学長の中間評価及び業績評価実施要項に基づき、学長が就任した日以後2年を経過した日から6月以内に在任中の業務の執行状況についての中間評価を行い、3年を経過した日から4月以内に在任中の取組により達成された実績に基づき業績評価を行うこととしている。

平成30年4月1日において、室伏きみ子学長が就任から3年を経過したことに伴い、在任中の取組により達成された実績に基づく業績評価を以下のとおり実施した。

I. 業績評価の実施

(1) 経過

平成28年6月7日 国立大学法人お茶の水女子大学学長の中間評価及び業績評価実施要項の制定

平成29年8月25日 中間評価の実施

平成30年7月26日 業績評価の実施

(2) 学長の面接

学長選考会議は、室伏学長が自ら作成した自己評価資料に基づくプレゼンテーションを受け、学長の在任中の取組により達成された実績等について意見交換を行った。

(3) 監事の意見

内海監事及び吉武監事の連名で提出された「学長の業績評価に関する監事意見書」を確認した。

(4) 確認資料

- ・ 所信表明（平成27年度～平成30年度）
- ・ 平成27事業年度に係る業務の実績及び第2期中期目標期間に係る業務の実績に関する報告書
- ・ 平成28事業年度に係る業務の実績に関する報告書
- ・ 平成29事業年度に係る業務の実績に関する報告書

II. 学長の自己評価に基づいた業績評価

1. 在任中の業務執行及び取組により達成された実績

1) オールお茶の水体制の構築

学長就任当初の所信表明時より、「オールお茶の水体制」の構築を一貫して押し進め、大学と附属学校園の連携、同窓会との連携に顕著な成果を挙げたことは高く評価される。

保育施設から大学院までが同一キャンパス内に存在するお茶の水女子大学の特徴を活用し、大学、各附属学校及び各同窓会を含めてお茶の水女子大学の総力を結集したことは特筆に値する。学長自ら附属学校園の会議や入学式・卒業式などの学校行事に積極的に出席して大学との繋がりを伝えるとともに、各同窓会とも会合を重ね、同窓会主催の講演会などでも未来開拓基金（寄附金）への協力を呼びかけるなど、熱意の努力が見られる。各附属学校の同窓会を中心とした多くの寄附につながったことからその成果は非常に大きいものであった。また、人間発達教育科学研究所において附属学校の教諭を研究員として所属させ共同して研究を進めるなど、大学の教員と様々なことを学びあう体制を構築したことも、大学と附属学校の研究における連携の実現であった。

伝統があることがかえってチャレンジすることを思いとどまらせ、保守的な運営になりがちになることがよくあるが、「オールお茶の水体制」を構築し、伝統校としての誇りを保持しつつ、附属学校園を巻き込んだ「お茶大イズム」とも呼べる共通感覚の醸成に努めたことは、様々な改革を進める上で必須の前提条件であったと考えられる。お茶の水女子大学にとって極めて適切かつ有効な施策であった。

2) 国立大学法人お茶の水女子大学の第3期中期目標・中期計画とビジョンの策定

学長就任直後から、「第三期中間目標・中期計画の策定」、「第二期中期目標の法人評価」、「認証評価の受審」に取り組み、教育・研究、国際化、国際・社会貢献、大学運営のそれぞれの面において高い目標を掲げており、国立女子大学としての使命を明確にしている。特に「グローバル女性リーダーの育成」の概念について、社会のあらゆる分野においてリーダーとして活躍できる人材を育成するという本学のミッションとして明確に定義づけたことは、特筆すべき業績である。このことにより、お茶の水女子大学が女子大としての立場や役割をより鮮明にし、本学の存在意義を明確に説明できる論理的な根拠の一つとなったものと評価できる。

3) 教育改革と質保証のための取組み

お茶の水女子大学が期待されている産官学の実践の場で活躍できる「高度専門職女性人材」の育成を推進するための①大学院における理系女性人材育成の高度化（博士課

程教育リーディングプログラム等)・多様化(奈良女子大学との大学院生活工学共同専攻の新設等)、②学部再編成による生活科学部心理学科の設置及び幼小教員免許取得を可能にする文教育学部人間社会科学科子ども学コースの開設、の2点は教育改革の大きな前進である。

博士課程リーディングプログラムは、中間評価において評価Aを獲得するなど優れた成果をあげている。また、第二期中期目標・中期計画期間中に開発した文理融合型リベラルアーツ教育の推進、グローバル人材育成事業、産官学連携によるキャリア教育等の多彩なプログラムを学生の自主的な選択・カリキュラム組み立てを可能にする「複数プログラム選択制度」に統合的に落とし込む作業を直接的に、また政策策定として間接的にリードし、立ち止まることなく質保証に努めたことは高く評価される。

心理学科設置と子ども学コースの開設は、限られた人的・物的資源の中、学長の強いリーダーシップにより実現したものであり、新しい国家資格である公認心理師の資格取得に向けたカリキュラムの整備が併せて行われ、社会のニーズを的確に捉えた新学科・コースの設置であり特筆すべき取組である。

今後は、「教育のお茶大」というブランドを維持するため、教育の質保証について、教学 IR・教育開発・学修支援センターの成果を全面的に利用するなど大学として取り組んでいくことが望まれる。

4) 研究の質の向上に向けた取組み

研究の質の向上に向けた取組みについては、機能強化への取組みと産学官の連携を掲げ、国内外の産学官機関との交流推進を図っており、特にヒューマンライフイノベーション開発研究機構、グローバル女性リーダー育成研究機構をスタートさせたことは、これまでになかった学内共同研究機関として独創的な存在であり、産官学の連携による研究の活性化が図られていることは評価できる。

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構では、文系(人間発達教育科学研究所)・理系(ヒューマンライフイノベーション研究所)のそれぞれ研究所が、その垣根を低くすることで文理融合の研究を推進、国内外に発信することとし、2つの研究所で18件もの受託・共同研究を推進している。また、グローバル女性リーダー育成研究機構の2つの研究所(グローバルリーダーシップ研究所・ジェンダー研究所)はお茶の水女子大学の伝統である女性リーダー育成に関連する研究・教育事業を大規模に展開しており、国際的に著名な研究者を招聘し、また、海外の機関と連携協定を結ぶなど様々な取組みに対し学長自ら精力的に取り組み、研究の質向上に尽力している。

産学官の連携も、他大学や民間企業と女性リーダーの育成や理工系分野の連携、研究者情報の発信などにおいて10の機関と連携協定を締結し、研究拠点を構築したことは、研究の質向上に貢献するものと評価できる。

今後は、科研費等の採択率のさらなる向上、機能強化に関する取組みや産学官連携の

推進の取組みが具体的にどのような成果に結実しつつあるかについて国内外への情報の発信「見える化」に積極的に取り組むことが期待される。

5) 国際化の推進と社会貢献

お茶の水女子大学は、女性リーダーの育成のために海外の大学・機関との交流を推進し、発展途上国の女性たちの教育支援も行ってきたが、学長はそれを引き継ぎつつ連携協定大学を64大学から76大学まで増加させ、学生にも様々な国・地域で学び、学問を発展させる機会を拡大した。さらに海外大学との連携拡大とそれに伴う海外出張、スペシャル・タナーレクチャーの開催や多くの海外招聘要人・研究者とのシンポジウムへの登壇、アフガニスタンや中西部アフリカの教育支援に関する研修の開催等、国際化の推進にあたっては文字通り“陣頭指揮”をとり、お茶の水女子大学の国際化に尽力したことは評価できる。

特にグローバル女性リーダーの育成のミッションの下、スペシャル・タナーレクチャーを開催したことや数多くの海外女性リーダーを招聘できたことは、お茶の水女子大学の社会的地位の向上に大いに貢献するものである。

さらに、お茶大創成期において海外に渡って活躍し、帰国後日本の高等教育における女性活躍の基礎を築いた卒業生たちの姿を、入学式・オープンキャンパス・卒業式等折に触れて学生たちに伝え、また新設のお茶の水女子大学賞の名称に冠する等、“国際化”は本学の伝統であり経常的ミッションであり続けていることを学生たちに熱心に伝承する姿は、イベント的になりがちなグローバル人材育成に関する諸事業を“生きた事業”にする効果があった。

このような環境により留学生の派遣も促進され、タイムズ・ハイアー・エデュケーションの世界大学ランキング日本版でお茶の水女子大学の留学比率が全国18位、国立大学では東京外国語大学に次ぐ2位と高く評価されている。

そのほか、被災地への支援はどの災害時にも迅速であったこと、待機児童解消に向けた文京区との連携による学内こども園の開設・運営も社会貢献上の特筆すべき業績である。

6) 大学運営に関する取組み

教員人事計画と若手研究者の雇用の促進について、将来像に関するエビデンス・ベースドな財務シミュレーションに基づいた全学の承継教員ポストの第3期中期目標・中期計画期間中の180人体制の維持の方針を定め、3学部それぞれの自主的な将来構想に沿った「第三期人事計画」を指導的に策定し実現したことは、教育研究体制の維持を求める教員の不安の解消・教員のモチベーションの維持に大きく貢献し、評価できる。

一方、若手研究者の雇用促進に伴う大学院教育の脆弱化や学科年齢構成のアンバランス等の課題は見受けられるが、総じて、可能な限り学内事情と国の方針のバランスに配

慮しつつ機敏に対応できている点は評価できる。

財政基盤の確保について、未来開拓基金や産学官連携等により目標値を上回る自己収入を確保したことは業績として高く評価できる。特に未来開拓基金を中心とした寄附金・寄附者の増加による財政基盤の確保はすばらしい成果であった。巨額の寄附金による「国際交流留学生プラザ」の建設は、お茶の水女子大学の国際化を一層推進するものとして期待できる。キャンパスマスタープランでは、大学の資産の効率的な運用や有効活用を図り、防災対策を見直すなど、学生・教職員の安心・安全面にも配慮していることは評価される。

2. 残任期間の大学運営に対する方針及び取り組む課題並びに今後、大学が中・長期的視点で取り組む課題等

1) 残任期間の大学運営に対する方針・取り組む課題

学長就任時の所信表明に基づき諸施策が実施され、その成果が次々と花開いている。しかしながら正念場はこれからであり、引き続き大学運営の革新に取り組むことを期待したい。特に、学長の指摘通り、外部資金の獲得、社会連携講座の開設、奨学金の充実など、10年先を見据えて、独自の安定的な収入を図ることは喫緊の課題である。

その際、大学への予算が縮減される中で、お茶の水女子大学の特色を生かしながら発展を目指すこと、研究成果の発信をホームページ等で分かり易く行い、受験生にもアピールすることなどにも配慮していただきたい。

また、女性に対するリカレント教育の推進は、社会に対する本学の存在意義を明確に示すためにも極めて重要であり、一層重点的に取り組まれるよう期待したい。

2) 今後、大学が中・長期的視点で取り組む課題

学長の所信表明に基づき諸施策が実施されるにともない、お茶の水女子大学に対する期待が高まってきたことも事実ではないか。こうした期待に応えるべく中長期的視点での課題設定が重要である。

お茶の水女子大学の教育力には定評がある。しかし時代の変化は激しく速い。教育力・研究力の持続的な向上を中長期的課題として明確に位置づけることを期待したい。

さらに、大学の連携、グループ化などが話題になっている中で、お茶の水女子大学が中・長期的に何を目指し、どのようにして生き残っていくべきかについて、課題と共にビジョンを示し大学内外の力を結集してひとつにまとめあげていくことが期待される。

III. 特筆すべき業績及び全体的なコメント

特筆すべき第1は、学長のリーダーシップにより、国立大学法人お茶の水大学の変革

に明確な進展がみられることである。

特に、学長就任時の所信表明に続き、年度毎に全学に向けて所信表明が行われ、それに基づいて諸施策が実施されている。しかも、所信表明が分かり易い表現であり、具体性もあるため極めて説得力がある。学長の業績評価における自己評価資料もこの所信表明に基づいている。こうした大学運営の基本は高く評価される。

さらに、これまで試みられなかった大学、附属学校園、各同窓会との連携を深める「オールお茶の水体制」が構築された。それらを活用して、共同研究、同窓会からの寄付の受け入れなどを実現するという、成果に結びつけたことは高く評価される。また今後の展開に大きな期待が寄せられる。

また、「未来開拓基金の創設」は高く評価される。平成 28 年度には 10 億 6500 万円、平成 29 年度には 3 億 9500 万円の寄附を獲得し自己収入を増加させたことは、財政基盤の充実・安定に大きく寄与している。ただし今後の持続的な活動が欠かせないことに留意すべきである。

第 2 に特筆すべきは、「グローバル女性リーダーの育成」を高く掲げた教育改革と、研究の質向上を目指した産学官連携の推進である。

新型 A0 入試「新フンボルト入試」の導入、大学院生活工学共同専攻及び心理学科を立ち上げたこと、ヒューマンライフイノベーション開発研究機構、グローバル女性リーダー育成研究機構をスタートさせたことは高く評価される。

さらに、研究の質向上に向けて、2 年間で国内の 10 機関と連携協定が締結されたことは、お茶の水女子大学の新しい挑戦として評価される。しかしながら教育・研究の質向上についての成果は、中長期的な課題であると認識すべきであろう。

グローバル女性リーダーの育成に深く関わって展開されている、お茶の水女子大学の国際化も高く評価される。特に、スペシャル・タナーレクチャーの開催などお茶の水女子大学の特色ある国際化が推進されている。

第 3 に特筆すべきは、キャンパスマスタープランの策定と実行である。このプランに基づき、大学正門の門扉復元、図書館の増改築、国際交流留学生プラザの建設に着工したことは、学長の業績として高く評価できる。

最後に特筆すべきは、活力ある社会環境の創出に貢献するさまざまな展開である。

夢の翼プロジェクトを立ち上げ、東日本大災害で親を亡くした子供たちに夢を与えるため毎年キャンプを行っていることは、子供だけでなく教員、学生、同窓会に対しても「ボランティア」「社会のため」の意識の醸成に役立っている。

トランスジェンダー学生の受入を表明したことは、「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する」というお茶の水女子大学のミッションを明確にし、他大学のみならず社会に与えたインパクトは大きく、お茶の水女子大学の存在感を示した大きな決定であったといえる。

IV. 総合評価

以上を総括し、室伏 きみ子 学長の業績評価に係わる総合評価は、「期待を大幅に上回る業績である」と判定する。